

IPT2021 第1次審査（入選作品選出）審査講評

まるで審査する側が審査されているような第1次審査だった。64の国と地域からの総計6000点近くの応募という多様すぎるほど多様な作品に出会う喜びとともに、紙媒体応募のA、B部門、データ応募のU30+Student事前審査通過作品の出力に対して、それぞれが票を投じていった。単純に得票数の多さだけで決めるのではなく、得票が過半数に達しないポスターについても意見を交わすなか、審査員自身が各々の選考のものさしについて自問する場面もあったが、その結果の気付きも多い。そのように、審査員全員が納得のいく議論を重ね、入選作品を選出していった。

応募作品はクライアントワークから自主制作のメッセージ性の高いものまで、多種多様。技術的には成熟していてもテーマの解釈が未熟なものがある一方、拙くても強く伝わるものもある。最終的には、技術の高さだけではなく、ネット環境の普及で紙のメディアの存在感が低下するといわれている状況のなかで、紙のメディアとしてのポスターの力強さと可能性を現代的に活かしたものが目をひいた。それとともに、テーマと技術や表現のバランスがとれているもの、そしてポスターの前に立つ者に「なんだろう？」と考えさせ、解釈の余地を与えるポスターが入選作品として選ばれたように思われる。

自主制作のメッセージ性の強いポスターでは、普遍的な環境問題や、リアルに世界が対峙するコロナ禍のテーマが目についたが、3.11の震災や原発の事、災害、紛争などはどうなったのだろう。大きいものから身近のものまで、テーマとなる問題はもっとあるはず。

また、テーマ「INVISIBLE」での作品募集は、見えないものとは何かを考えることを促すIPTからの問いかけだが、その答えも些か偏っていた感がある。作る側が普段どんな事に問題意識をもっているのかが、ポスターでは露わになるということだろう。

そのようなメッセージ性の強い作品の対極のように、ユーモアや柔らかさで理屈抜きに「何これ？」と思わせる世界があるのもポスターの面白さだ。誰かが「これ面白い」と1枚のポスターを指したとき、制作者がその面白さに気づいていないのではと、審査員で話した場面があった。IPTは、自分では気付かない良い部分を発見する機会かもしれない。

また、組作品やシリーズのポスターを見ていく中で、「1枚のポスターで語り切る」ことを考えさせられた。複数枚で構成されるポスターは力強く物語的な要素があるが、複数枚で成立する内容を1枚に潔く切り取れることもポスターの力強さなのではないか。

ポスターは、オリジナルの視覚表現で自身のメッセージを投げかけることができるメディア。そして、映像とも動画とも異なり、観る者がピントを合わせるメディア。その魅力は何なのだろう。情報発信とコミュニケーションの手段が多様化し、その中で国内外問わず地域性がフラットになっている今だからこそ、「なぜこのテーマなのか」「なぜポスターなのか」を問いながら、1枚の紙であるポスターの新たな面白さと今日における可能性を発見していく時期なのではないか。

※2021年4月13日の第1次審査終了時に、6名の第一次審査員各氏より審査講評について意見交換・聞き取りした内容を、富山県美術館にてまとめました。